14

藩閥政治から見た済生学舎廃校の真の原因：山県有朋，池田謙斎，入沢達吉との関係

殿﨑　正明，唐澤　信安，岩﨑　　一，志村　俊郎
日本医科大学医史学教育研究会

長谷川泰の経営する済生学舎廃校の真実は，長州閥の山県有朋（やまがた　ありとも），初代東京帝国大学綜理池田謙斎，東大赤門派閥教授入沢達吉等による藩閥政治的権力によるものである事を報告する．

入沢達吉は，従来から医政は或る一派の人々のみが勝手に攪き廻して来ているので面白くなく感じており，田代義徳と一つ反対をしてやろうということで，長谷川泰等が大日本医会で「医師は医師会に加入するに非ざれば，患者を診察することを得ず」，「内務大臣は医師会に加入せずして患者を診察する者あるときは，其の業務を停止す」という内容を含む衆議院で可決していた「医師会法案」を東京帝国大学教授達の反対運動により貴族院で否決するに至った．

直接の原因：医薬分業問題と衛生局長の辞任

山県有朋は，明治34年伊藤博文内閣の崩壊後，山県の直系の桂太郎が組閣後表舞台から退くが組閣や重要法案への介入などを通して影響力を発揮していた．

明治34年1月から「薬律改正問題（医薬分業論）」が起り，長井長義等が長谷川泰衛生局長に薬律改正法案の国会提出を迫る．長谷川泰は，医師数が約3万2千人，薬剤師数が2千5百人と絶対数が足りないので医薬分業は時期尚早である事を理由に反対すると，日本薬局方調査会の丹波敬三，青山胤通，山田薫，小池正直等入沢達吉を含む委員が総辞職し，結果として長谷川泰は時の総務長官山県有朋に責任を取らされ衛生局長職の辞表を提出させられた．

慶應4年，新政府が組織する征東軍の北陸道鎮撫総督府（会津征討越後口総督府軍）参謀山県狂介（有朋）は，その途中にある長岡藩との北越戊辰戦争で二ヵ月半に及ぶ想わぬ抵抗に遭う．その時の長岡藩家老上席軍事総督が陽明学を学んだ先見の明のある河井継之助で，長谷川泰はその河井継之助に三人扶持で雇われた軍医であり，山県有朋は長谷川泰に嫌悪感を久しく持っていた．

専門学校令

入沢達吉をはじめとする東大赤門派閥「明治医会」は，「日本の医学を良くするためには医術開業試験を廃し，粗末な私立医学校を廃校にして官立の医学校を充実させるべきである」と決議し（「医学教育統一論」），文部省と秘密裡に協議し，明治36年3月26日，文部省の勅令第61号を以って突然「専門学校令」を発布する．今後私立医学校が存続する為には，文部大臣の「認可」が必要であることを明記し，末尾に官立並みの実験設備及び建物の完備を要求し，「期限は翌年の3月31日までに手続きを取らなければ廃校と看做す．調査により一点でも欠点があり，不認可の命令を受けたるものは，その命令を受けた日に於いて廃校と看做す」といった済生学舎を標的にした厳しい条文が付記されていた．長谷川泰は，専門学校令に準拠するため或は済生学舎を私立医科大学とするために明治34年4月から，明治17年12月以降受け入れていた女生徒約70名の受け入れを拒絶したり，所有地本郷区真砂町（元黴毒病院跡，約400坪）に校舎を新築する計画を持っていたが，やはり一年以内に教育環境を整えることは不可能と判断して明治36年8月31日をもって廃校にした．

まとめ

天皇の侍医であり，山県家の主治医であった池田謙斉は山県有朋との50通にわたる書簡が残っており，特別な関係であった事が分かる．

入沢達吉は，長谷川泰が明治45年3月11日に亡くなった時，3月16日付の日本医事週報に，信陽生というペンネームで，幼少時にお世話になった同郷の先輩長谷川泰に対して金銭面での出し惜しみをしたために済生学舎が廃校になったと論じている．同郷の先輩が亡くなった時に，悪行を紙面に書き残すような行為は，大学教授としては極めて恥ずかしい行為ではないかと考えられる．